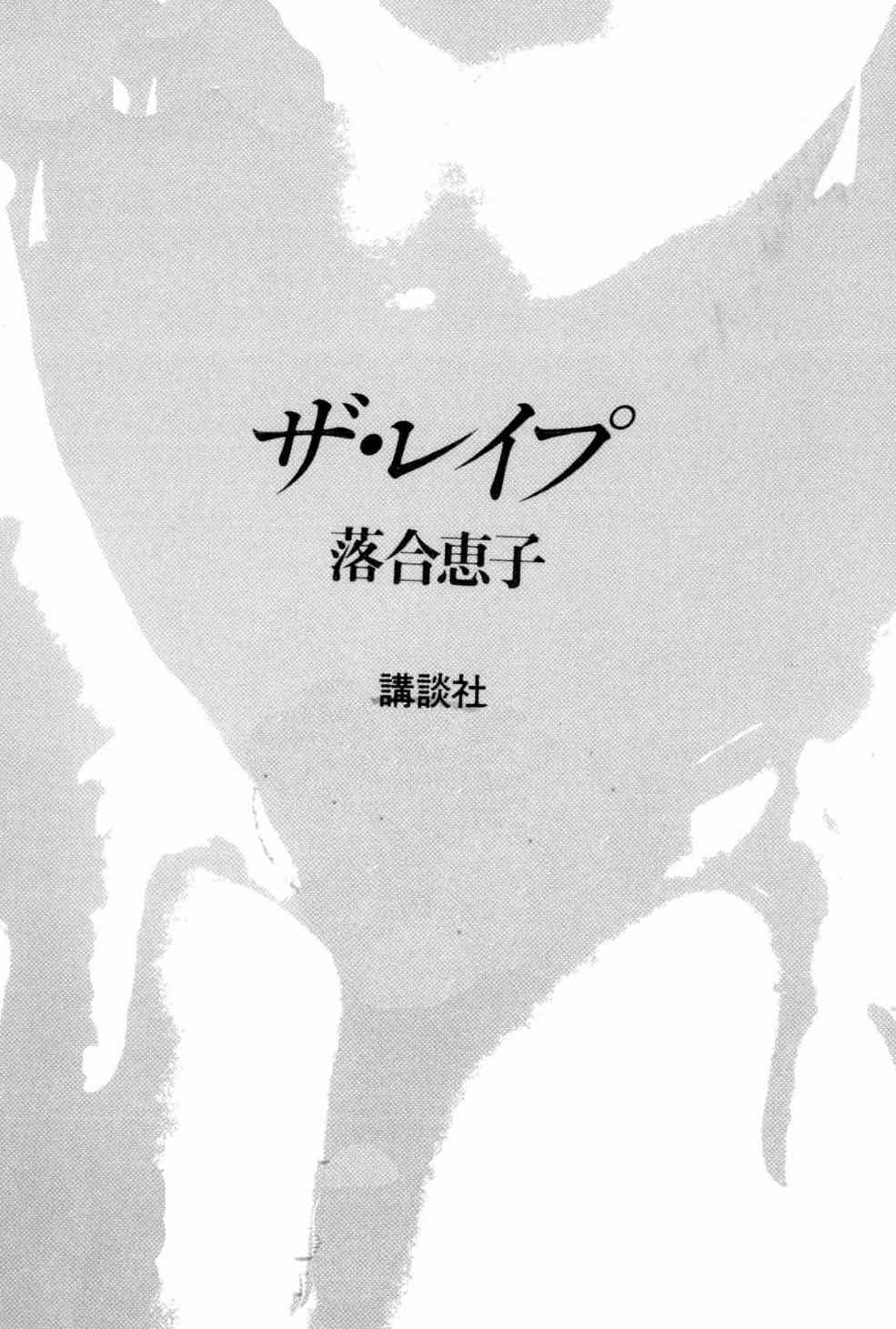


ザ・レイプ

落合恵子





ザ・レイプ

落合恵子

講談社

ザ・レイプ

定価 八九〇円

第1刷発行 昭和57年4月25日

第6刷発行 昭和58年8月22日

著者 落合恵子

発行者 加藤勝久

発行所 株式会社 講談社

〒112 東京都文京区音羽2-12-21
電話 東京(03)945-1111(大代表)
振替 東京8-3930

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 黒柳製本株式会社

著・本・乱・本は、小社書籍製作部宛にお送りください。
送料小社負担にてお取り替えます。

© KEIKO OCHIAI 1982 Printed in Japan

ISBN 4-06-130843-2 (0)

(文2)

目次

ザ・レイプ

5

陽だまりのふたり

107

あとがき

186

装帧 安彦勝博

ザ・
レイプ

1

矢萩路子は、右手に、ひどい痛みを覚えた。
 フィルターのつけ根ぎりぎりまで短くなった煙草が、人さし指と中指の第一関節の皮膚を焼いていた。

それに気づいた時、長くなっていた灰が落ちた。

灰は、膝頭に当たって、粉になった。

路子は、ひねり潰すように、煙草を灰皿に押しつけた。

火が消えてもなお、路子は執拗に、灰皿に吸殻をこすり続ける。

——ああ、いやだ。

思わず、路子の唇から声が洩れた。

——いやだ、いやだ。

路子は、奥歯を噛んで、天井を仰いだ。
消したい記憶が、そうすれば消えるかのように、音がするほど、さらに強く奥歯に力を入れた。

妙な夢を見ている、と路子は思った。

ひきつれた表情の男が、路子の牀を跨いで、見おろしていた。

一瞬、男の目が、黒縁の眼鏡の奥で囁いたように思えた。

男は、ズボンのベルトに手をかけた。

焦っているのか、震えているのか、なかなかはずれない。

何度か、ガチャガチャとやったうえで、ベルトを抜き取ると、男はズボンを膝までおろした。

そして、路子の腹の上に乗ってきた。

その時になってようやく路子は、事態がのみこめた。

夢ではなかったのだ。

家への帰途、路子を追ひ抜いた車の男が、そのまま路子の前に立ちはだかり、当て身を
加えたのだった。

あの男が、いま路子に覆い被さろうとしていた。

「こないで！」

悲鳴を挙げたが、それは、声にならなかつた。声が喉に貼りついて、出てこなかつた。

路子は、自分の顔に伸びて来る男の手を、振り払った。

振り払った手が男の顔にあたつて、眼鏡がふっとんだ。

血走つた光が、男の細い眼の中にあつた。

激しい勢いで、男は路子の両頬を張つた。

殺される。

抗えば殺される。

その恐怖心が、牀の中を走り抜け、路子は、一瞬ひるんだ。

そのすきに、男は、驚くほどの素早さと力を見せた。ベルトで路子の両手首を縛りつ

け、頭の上に持つていった。

そうしておいて、男は自分の下着をおろした。凶器となつた男の性器が、路子の目をと

らえた。

やめて、やめて、お願いやめて。

声にならない声をあげた。

路子は、縛られたままの両手首を、何度も男の頭の上に振りおろし、足をバタバタさせた。

男はそうさせたまま、路子の中に押し入ってきた。ひきつれるような激しい痛みがあった。

路子を刺しておいて、男は声をたてずに嗤った。そして、路上の上で、忙しく動きはじめた。

自分の躰なのに、感覚がないようなところがあった。

路子は、自分の躰に加えられている現実がわかっていた。しかし、呆けたように目を開け、男の頭を越えて空をみていた。

路子のみつめる空に、丈の高い草叢が見えた。

そこに、下半身を剣き出しにされたまま死体となっている自分を思った。

ここにいるのは、私ではなく、他の誰かなのだ。これは、私であるはずがない……。

そう思おうと路子はむなしい努力をした。夢であってほしいと願った。が、絶え間なく突き上げてくる嘔吐感^{おうと}が、路子に、いま起きているすべてが、現実のことだときつつけ
る。

紛れもなく男は、凶器を路子の中に刺して、激しい息をしていた。

何度か、「畜生！」という男の声を、路子は聞いたように思った。

どれくらい続いただろうか。

五分のようにも、一時間のようにも思えた。

やがて、男は、路子の牀の上で、奇妙なうめき声をあげて果てた。

その瞬間、路子は、倒された姿勢のまま、鳩尾^{うなづ}のあたりからせりあがってきた苦い液を、空中に噴きあげた。

「終わったよ」

はじめて、はっきりと男の声をきいた。

少しかすれた、けれどどこかに子どもっぽさの残る妙な声だった。

勢いを失った男の凶器が、濡れて光って見えた。男は、路子を見おろしながら、ゆっくりと身仕舞^{みじまい}をした。

「よかったか」

男は、言った。

路子の全身を、激しい震えが襲った。

男のその言葉が、おぞましいもうひとつの凶器となって、路子を貫いた。

再び、路子の口中に苦汁が溢れた。

それは、路子の顎を濡らして、首すじを伝っていった。

男は、草の上にとんだ眼鏡を拾って、かけ直し、路子の両手首を縛ったベルトを解いて、立ち去った。

ずいぶん経って路子は、躰を起こした。

ひきちぎられた下着とスカートが、足元に、白く鮮やかに散らばっていた。

路子は、放心した気持の中で、ここが、マンションの近くにある小さな空地だったことに気がついた。

路子が、男に押し倒された場所の夏草が、無残な形で倒れていた。

草の間から、ふらりと現れた野良犬が、路子に驚いて、飛びすさった。

鳩尾には、当て身の時の鈍痛が、まだ残っている。

思い出したくないことが、エンドレス・テープのように繰り返し、路子を襲っていた。
「よかったか」という男の声のところにくると、路子は、気が狂いそうになった。

——いやだ、いやだ。

記憶は、いつも夢のような出来事として始まり、すぐに現実のものとして、路子を奈落に突き落とした。

悪夢としては、あまりに凄惨だった。

現実としては、あまりに無残だった。

新しい煙草に火をつけて、路子は、左手首の裏側を凝視した。

静脈が、うっすらと青い線を走らせている。そのあたりに、ナイフを当てさえすれば、すべてを葬り去ることができる。

踏みにじられた肉体とともに、踏みにじられた知覚をも消すことができる。

しかし路子は、手首の裏側にナイフの替わりに、煙草の火を押し当てた。

柔らかな皮膚の一点に、ひりつくような熱さが、走る。

その熱さが、じきに痛みに変わって、路子の全身を貫いた。

路子は、火を押し当てた一点に、暗紅色の水疱すいほうが盛り上がるまで、その行為を止めなかった。そこに、路子の暗い情態じやうたいがあった。

気がつくとも、震えも嘔吐感も間遠まどろにはなっていた。

路子は、部屋のほぼ中央に正座したまま、周囲をゆっくりと見回した。そこは自分の部屋だった。

この五年間、路子に、ひとり暮らしの気楽さと、二十八歳の女にとって、ちょうど適量の孤独な空間と時間を提供してくれた彼女自身の部屋だった。

何ひとつ変わったものはない。

昨日の朝、出勤した時と同じだった。

路子だけに攪乱かくらんがあった。

——強姦されたのだ！

強姦の二文字が、路子を灼やいていた。

沖合で生まれた波のように、屈辱感くつじやくかんは、牀のどこか深いところから、次々に路子の意識に向かって寄せていた。

そして、路子を呑みこみ、錯乱さくらんさせるのだった。

間断ない屈辱の波に、路子は、自分の二十八年間が、粉々に砕け散っていくのを見ていた。

路子は、自分の中に、様々な声を聴いていた。どれも、路子の中の、もうひとりの自分の声だった。

——不運だと思って、諦あきらめろ。

——殺されなかっただけでも、よかった。

——忘れられるはず。

——いつか、忘れられる。

——忘れたふりぐらいできるはず……。

ずきずきと熱く脈打つ顛こめかみ顛を、立てた膝に当てて、路子は、声が聞こえてくるほうを、覗のぞきこんだ。

忘れられなくても、忘れた振りぐらいならできるかもしれない……。

「よかったか」

しかし、また、あの粘液質よみかえな声が甦よみがえり、路子の思考を容赦ようしゃなく寸断した。

男の声を振り払うように両手で耳をふさいだ路子に、再び心を凝視するよう命じる感情があった。

心には、不思議と悲しみの翳はなかった。

恐怖も、すでに遠去かっていた。

屈辱と嫌悪だけが、巢食っていた。

やがて路子は、心の内に貼りついた屈辱の向こうに、別の感情が頭をもたげ始めたのを見た。

それはまだ、靄のようで、はつきりとした姿はとっていない。

路子は、前歯で下唇をしごきながら、みじろぎもせず、その靄を見つめ続けた。

靄は、心を占領した屈辱感をわきに押しやり、まもなく、ひとつの形を整え始めた。怒り。それは、怒りだった。

熱く激しい屈辱が、冷たく厳しい怒りを呼んでいた。

怒りは、路子の心に、冷たい火を放った。

一瞬のうちに、火は、路子の全身にひろがった。

その火にせかされるように、路子は、身につけていたすべてのものを剝ぎとった。